

# 英語教育における文化教材としての文学作品の意義

中村 愛人

(2003年9月30日受理)

Significance of Literary Materials for Culture Teaching in English Language Education

Yoshito Nakamura

Literary works have long been used in English language education in Japan. It has been taken for granted that they have diverse merits as well as demerits, while recently more attention has been paid to their demerits, and consequently fewer literary materials have been in English textbooks. It is only in recent years, however, that their significance in English language education has been discussed more or less analytically. The aim of this paper is to examine them as materials for culture teaching and to discuss their merits and demerits and how to make effective use of them.

Key words: literary materials, culture, culture teaching, intercultural understanding

キーワード：文学教材，文化，文化教授，異文化理解

## 1. はじめに

英語の教材として文学作品が使われて来た歴史は古い。しかし、英語教育におけるその意義や位置付けについて、分析的に論じられるようになったのは、近年になってからであろう。文学教材には、英語教材として幾つかの利点が指摘されている。1) 様々な style の authentic な言語材料を提供出来る。2) 言語能力 (literary competence) を発達させる。3) 個人の成長や人間性を豊かにする。4) 文化学習に効果的である。5) 作品への興味から学習の動機づけになる。以上がその主なものである。外国語教育において、言語の運用能力の獲得と並んで文化学習の重要性も異論の余地のないところであろう。教育的な意義等を別にして、異文化間コミュニケーションのためだけを考えても、文化理解が必要になる。“Language is used to convey meaning, but meaning is determined by the culture.” (Chastain, 1988: 316)

本論文では、文化教材としての文学作品の意義と位置付けについて考察する。この点に関しては、文化学習はその他のものでも出来る。文学作品は、その文化を忠実に反映していないのではないか、など様々な議論の余地がある。まず、文学作品が、どのような文化

情報を学ぶ切っ掛けになり得るかを、具体的に高等学校用の英語教科書に使われている一つの作品において検討し、それを踏まえて議論を進めたい。

## 2. *The Umbrella Man* by Roald Dahl<sup>1)</sup>

全体的に、余り特有の文化とか時代性などの特徴は大きなものではなく、楽に読むことができ、三人の人物それぞれのやり取りや心理のあやの表現など巧妙で、最後にあっと言わせる結末 (surprise ending) もあり、中々楽しめる作品であるが、ここでは、先ず、参考のために作品の粗筋を述べ、その後で文化的な背景に関連した事項のみを取り上げる。

〈作品の粗筋〉

34歳の母親と12歳の娘が、ロンドンで歯医者に行き、その後カフェで一休みする。ところが帰ろうと外に出るとひどい雨が降っている。傘の持ち合わせもなく困っていると、老紳士がやってきて、財布をうっかり忘れたので、タクシー代の1ポンドを貰えれば高価なシルクの傘を差し上げようと申し出る。初めは警戒していた母親も、紳士の話を聞いて、高価な傘はいらないから、1ポンドをあげましょうというのだが、彼は聞き

入れず傘と交換し、礼を言って別れる。立派な紳士だったと二人で話していたが、急ぎ足で去って行く彼のこと気がなり、後を追うことになる。すると彼はパブに寄り、1ポンド払ってウイスキーを飲み、掛かっていた傘の一つをさりげなく取って通りに出ると、また別の人物からその傘と交換に1ポンドをせしめ、恐らくまた別のパブへ向かって、急いで去って行った。

<café>

軽食と飲み物を提供する気軽なレストラン。イギリスでは、アルコール類はない。余りお金をかけない飲食や時間つぶしをするために利用する。(LDEL) この説明からすると、庶民的な日本の喫茶店かファミレスに相当するであろう。そのように考えると、文化的にそれ程の違いはないが、ただ、作品の母親が、老人をいぶかしく思いながらも、高価な絹の傘に釣られて交換条件に応じることになる気持ちが理解できそうである。

<a banana split>

縦半分に切ったバナナの上にアイスクリーム、果物、ナッツなどを添えた甘いデザート。(LDEL) フルーツパフェなどの類いと思われるが、日本にもあるのかどうか、残念ながら筆者は知らない。少し具体的に説明が出来れば、作品の12歳の娘がもう一つ食べたいと思うくらいだから、学習者の興味も大いに引きそうである。

<rain>

自然現象としては、同じ「雨」であるが、降り方やそれをどのように表現するか、更に、雨に対してどのような気持ちを抱くかなどの日英の違いも興味深い話題になるであろう。日本では、梅雨から台風の季節にかけて、つまり圧倒的に夏に雨量が多いが、イギリスでは逆で、冬期に多い。寒い季節に雨は一層いやがられるであろう。救いは、日本のように土砂降りの雨はそんなに降らないということ。

<ordinary hats and coats>

帽子やコートは、イギリスの生活においては欠かせない衣服のアイテムであろう。但し、帽子はかつての様にはかぶられなくなってきている。最近では、日本でも、コートはもとより帽子も割りと利用されるようになって来たが、気候風土との関係や服飾の伝統の違いなど説明できることは多い。

<a car with a chauffeur>

国民の大多数が自分は中流だと考えていて、確かにそのような暮らし向きをしている日本では、それ程馴染みがないが、イギリスでは、庶民には手が届かないにしても、そのような家庭も珍しくないであろう。“I wish we had a car with a chauffeur.” という母親

の発想は、日本ではすぐに出てこないものではないだろうか。

<He raised his hat politely...>

前述の帽子に関連した挨拶の習慣であるが、“touch one's hat”よりも丁寧で、老人の紳士然とした印象を強めるものとなっている。

<a gentleman>

元来は階級的な意味合いが強かったが、次第に「礼儀正しく、人に対する思いやりの心を持ち、立派な行いをする男性」(OALD) と言う様に、人格に注目して用いられることが多くなっている。因に、紳士の典型的な身嗜みは、山高帽をかぶりダークスーツを着て、ステッキ代わりの傘を持っているもので、ほぼ作品の老人に当てはまっている。「履いている靴で紳士かどうかを見分けることができる」と作品に出て来るが、日本でも、人物の暮らし向きについて、それに近い見方がされている。

<the umbrella>

イギリスの気候・天候との関連、紳士の身嗜みとの関連で話題に出来るであろう。但し、最近特に若い層を中心に余り傘を持ち歩かなくなっているようである。それ程ひどい雨ではないし、帽子にレインコートの方が身軽で、風の強い日は一層実用的でもある。

<a pub>

a public house の短縮形でこう呼ばれるようになった。イギリスの人々の酒場であり、くつろぎの場であり、社交場であり、情報交換の場でもある。営業時間は、この作品の時点では、まだ法によってかなり厳しく規制されていたが、その後、1993年に緩和された。パブは、作品の The Red Lion の様に、由緒ある名前が付いている。また、日本語の「梯子酒」に近い a pub-crawl と言う表現も面白い。作品では、bar や barman その他パブに関連した表現も出ている。日本では、それぞれカウンターとかバーテンダーとか言っているので、少し説明が要るかも知れない。残念ながら、高校生の年齢では中に入れても、18歳までは酒類は飲めない。

<a pound note>

1ポンド紙幣は、その後廃され、1ポンドコインだけになっている。関連してイギリスの貨幣制度の変化についても、要点は押さえておきたい。

また、作品に出ている身振り・仕種の表現も興味深い。

<...she was staring down at him along the full length of her nose.>

<this frosty-nosed stare>

<a really foul frosty-noser>

「冷たく見下すような目付き」を言ったものだが、高い鼻と鼻筋の通った容貌をして無いと出来そうにない。初めの表現など、顔の中でそのように鼻が突出して目立つからこそ生きてくる。

〈He...gave a quick bow from the waist...〉

良く知られているが、欧米では、日本人の様に何度も深くとお辞儀はしない。ここでは1回のお辞儀はあるが、最大限の敬意を払っているかと見せて、いかにも紳士然とした印象を与えようとしているのは、前の帽子の挨拶と同じである。

身振り・仕種については、必要かつ興味深い話題でもあり、更に説明を広げることも良いであろう。注意したいのは、それ自体がある文化に特有なものの場合と、同じものでも表現の仕方が違う場合であろう。顔の表情などは後者で、文化によってそれ程違うはずが無いと思われるが、どの特徴で捕らえて表現するかで違って来る可能性がある。例えば、怒って相手を睨みつける時、日本語では、「眉をつりあげる」と表現し、同じ様な表情のはずなのに、英語では逆に、“lower one's eyebrows”“draw one's eyebrows down”などと表現している。

以上、作品において、学習の切っ掛けとなり得る文化情報の主なものを取り上げた。取り上げたものだけでも、日常生活の衣食、礼儀作法・挨拶、自然・天候、社会制度・階級、身振り・仕種など多岐に渡っている。このように、わずか数ページの短編作品でも、作品の読みと鑑賞に加えて、豊かな文化学習の機会を持つことが出来る。

### 3. 英語の理解と文化知識

これらは、作品の読みを通して得られる情報であり、同時に、作品の適切な読みに必要な情報でもある。「語彙や文法といった言語的知識を一応備えていたとしても、英語の文の背後にあるもの、つまり、英語を母語とする者なら誰でも持っていると思われる常識、彼らを取り巻く文化、世界に関する知識を読み手が共有していない場合、その英文の真の意味合いを把握することが困難になることが多い。」(天満：69)これは、英文読解一般について言われたものであるが、勿論文学にも当てはまる。例えば、この作品の場合、老人のいかにも紳士らしい物腰や母親と娘の庶民的な暮らし向きが読み取れていなければ、読者は、必要以上と思えるほど警戒しながらもだまされてしまう母親と娘に共感することは出来ないだろう。

そして、実際は、そのどちらを主にするかで扱い方を変えれば良い。前者を主とするのなら、この方が多

いであろうが、その妨げにならない程度に、そして読みに必要なものに限って文化学習を取り入れることになる。後者、すなわち文化学習を主とするのなら、作品を文化項目の状況説明に利用して理解を図れるのではないだろうか。

### 4. 異文化理解教育と文学作品から学ぶ文化

ここで、その程度の情報なら、イギリスの文化や生活について書かれた本からでも得られるのではないかということが言われるかも知れない。確かに、文化論とか生活情報の本を手にする方が直接的でわかりやすく情報量も多いであろう。それでは、そのような文化情報と文学作品を通して学ぶ文化情報に違いは無いのだろうか。また、そもそも私たちは如何なる文化を学ぼうとしているのだろうか。

伊原(1996: 54-55)は、異文化理解教育については、認知的局面、情意的局面、行動的局面的全てが立体的に作用し合うことが必要で、異文化を知ると言うことに止まらず、自分と相手の文化の相違に対して寛大な態度を養い、相手の文化を通して自文化を観察する共感力を育成し、文化間の価値観や行動様式の違いを理解したうえで、それらの違いに対応していける適応力と技能を養成するとした。それは、人間教育すなわち異文化を理解し寛容と協調の態度を培い、文化相対主義の価値観を身につけること、及び、異文化間コミュニケーション能力を高めるためであると言えることができる。また、遠藤(1989: 102)も次のように言っている。「他の文化を理解することは決して容易ではない。解説を読むだけで一つの文化が理解できる、などと考えるのは間違いである。真の理解とは、その文化そのものに触れ、そしてそれを知ることによって、自分の内部になんらかの変化が生じることであるといえよう。」

二人の意見を引用したが、ここで注目したいのは、前者では共感力、後者では、一口に文化を理解すると言っても、真の理解に達するのは容易ではないということ、それには体験に近いものが必要だろうということである。そしてこれらは、まさに文学作品の得意な分野であり、解説書、説明書では、いくら詳しくても実現できそうもない。

文学を価値あるものとして、「為になる」「教訓が得られる」などと言うのは、逆に、文学の価値を減じこそすれ、擁護することにはならないであろうが、文学作品の読みにおいて、たとえ悪党であろうとも、生い立ちやその後の成り行きを見守り、行動の動機などを

知らされれば、ついその人物に共感してしまう、主要人物に感情移入をして作品の物語を生き感動することは、誰にでも起こり得る事ではないだろうか。このことから、文学作品は、感情を豊かにし、共感する力を育ててくれるということは言えそうである。また、同様に、作品において読者に体験をさせてくれる。それは、間接体験、追体験、代替経験 (vicarious experience) などと呼ばれている文学作品の大きな特質となっている。このような文学作品の特質を考えれば、文化や生活情報の解説書などとは違った文学作品ならではの文化学習ができそうである。情報が得られても、それが単なる知識の段階に止まっていたら、不十分であり、それが体験することを通してある程度まで消化でき、態度や適応力として準備されなくてはならない。ここに文学作品を通して文化を学習する意義が存在する。すなわち共感・体験を通して文化学習である。

## 5. 文学作品に描かれている文化

ここで一番の難問に答えなくてはならない。文学作品は、正確にその文化を反映しているのかと言う主張である。文学作品を通して文化を学習しようとしても、そもそもその情報が間違っていたら、話にならないではないか。しかし、文学作品と言っても、比較的忠実に文化を写しているものから、どこの国のどの時代のものかもわからないようなものまで様々にある。一概には言えない。ただ言えるのは、文学は現実を忠実に描くことは目指していない。それが目指すのは、人間や人生の真実を追求することであって、事実ではない。従って、そこに描かれた文化は、解説書、情報書の類い以上に、その正確さに関しては注意を払わなければいけないだろう。

## 6. 文学の普遍性と個性

ここで、今一度文学作品について振り返って考えることにする。文学作品は、普遍性と個性を備えている。普遍性は、時代と場所を超えて変わらない特質であり、人間と人生の真実の姿である。私たちが、他の国の文学作品、あるいは昔の文学作品を読んでも、理解し感動するのは主にこれによる。しかし、本当に感動できるのは、そこに生きた人間が存在しているからではないか。普遍性のみでは人間の肉付けがなされず、生きることができない。普遍性を備えながら、他のどこにもない、他の誰とも違う個性が無ければいけない。この両者を備えて、初めて、その人物は生き、そして読者を感動させることができる。

確かに、文学作品は、必ずしも文化について正確な情報を与えてくれるわけではないが、この普遍性と言うことでも、文学作品を通じた文化学習の意味がある。文学作品の読みの感動は、普遍性によるところが大きいと言った。読者は、作品の中で、他の国の人や異文化の人の生き方や様々な営みに触れる。そこには自分とは相いれない生き方もある、価値観もある、現実離れのした展開もあるかも知れない。それにもかかわらず、普遍的な人間や人生の真実に出会い共感し感動する。そして、人間はどこでも同じだ、という感慨を新たにすることになるだろう。場所が変わり時代が違っても人間の本質は同じだという認識、同じ仲間だという認識が持てるなら、文化学習の目標である一般的な対異文化寛容性 (中村 1983) にまで育てることはそれ程難しくはないであろう。

## 7. 文学教材による文化教授・学習への配慮

次に、文学作品を通して文化教授・学習に関しての注意点を考察する。1) 作品選択。教材としての作品の選択は、どんな場合にも重要であるが、文化学習においても同様である。先ず、比較的正確に文化を反映した作品を選ぶ。それも、初めのうちは、異文化情報の少なめのものが良いであろう。学習者の英語力を考慮することは当然である。文化教材としての文学作品が本当に効果を上げるのは、作品を体験出来る英語力が必要であるが、充分ではないにしても、文学作品の幅は非常に大きいので、レベルに応じた作品を選べば良い。2) 教師の補足説明。作品の文化的要素を検討して、誤った情報は修正する。理解の難しいと思われる情報についてはわかりやすく補足説明を加える。今回の作品においても、既に指摘したことであるが、例えば、gentleman の意味合いの時代による変化や gentleman と umbrella の組み合わせも必ずしも固定したものではなくて来ている。どの時代のどのような文化を学習しようとしているかの考慮が必要になる。また、生活様式や風俗習慣など、いわゆる目に見える文化 (overt culture) だけでなく、その根底に脈々と流れる考え方などの隠れた文化 (covert culture) も出来れば説明に入れたい。3) 普遍性の重視。特に目に見える文化の場合、作品の意図によって、ぼやかされたり、歪曲されたり、不正確な言及がなされている可能性がある。もちろん、教師の側からの補足説明等で埋め合わせとしても、作品の鑑賞が疎かに出来ないこともある。作品の鑑賞と文化的正確さのバランスの問題になるが、そのような作品の場合は、やはり根

底に流れる変化の少ない、ものの考え方や価値観などに注目するのが良いだろうし、また、逆に、徒に違いばかり追い求めるよりは、共通した普遍の人間性の方に積極的に目を向けることも、文化学習の目的にかなったことであり意味があると言えよう。

## 8. おわりに

今回検討した *The Umbrella Man* は、話が面白く、文化情報についても正確さにおいてそれ程問題の無い作品であった。主要な登場人物三者のやり取りや拘わりあいが生き生きと描かれ、母親と娘の心理描写も巧みで、作品の語り手である娘の母親を見る距離感も真実味がある。目に見える文化情報については、既に言及したが、その奥にあるイギリスの文化としては、人間観察・批評の精神とユーモアのセンスが読み取れるだろう。母親と娘は、ベテナーの手際にまんまと騙されるが、その事実に気づいた時、怒りを超越して感嘆の声さえあげる。衝撃的な事実と直面して、ゆとりを持って対処している。見事なユーモアのセンスではないだろうか。

ユーモアのセンスは、確かに、イギリスの国民性に根差したものであり、イギリス文学の伝統とも見なされる特質である。しかし、日本人の読者にも、作品を読むことによって、理解、共感出来るものであり、見習いたいという気持ちさえ湧いて来るのではないだろうか。このようにして、人間性の、国を超え民族を超えた共通性を体験出来るならば、彼の人達と同じ仲間と考えることが出来る、延いては、異文化に対して理解と寛容の心を育て、適応力の一端を養うことが出来るであろう。

最後に、英語文化と異文化理解の関係であるが、最終的には異文化理解を目指すとして、英語を学習する立場にある者としては、先ず近づきやすい英語文化の理解から入り、異文化の一つである英語文化の理解を

通して、異文化への態度や対応の仕方を身につけるという順序にすれば良いと考える。

### 【注】

- 1) 大熊昭信 他(1998) *MILESTONE English Reading* 新興出版社啓林館 1998年検定済み 124-136 *The Umbrella Man* は、速読用の教材として入れられている。

### 【参考文献】

- Brunfit, C. and R. Carter, (ed.) (1987) *Literature and Language Teaching*. Oxford University Press.  
 Chastain, Kenneth (1988) *Developing Second-Language Skills: Theory and Practice*. 3rd ed. Harcourt Brace Jovanovich.  
 Crowther, Jonathan et al. (eds.) (1995) *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. 5th ed. Oxford University Press. (OALD)  
 遠藤栄一 (1989) 「異文化理解のための教材論」『新・英語科教育の研究』(片山嘉雄・遠藤栄一・垣田直巳・佐々木昭編 大修館書店) 102-108  
 井上義昌 (1988) 『英米風物資料辞典』開拓社  
 伊原巧 (1996) 「異文化理解教育を目的としたリーディング指導」『新しい読みの指導』(渡辺時夫編著 三省堂) 54-59  
 小林祐子 (1991) 『しぐさの英語表現辞典』研究社  
 中村敬 (1983) 「異文化理解への視点」『英語展望』No.80  
 Summers, Della et al. (eds.) (1992) *Longman Dictionary of English Language and Culture*. Longman. (LDEL)  
 天満美智子 (1989) 『英文読解のストラテジー』大修館書店